

渋江抽斉著『靈枢講義』所引「古抄本」について

永塚 憲治

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

受付：平成21年11月30日／受理：平成22年9月17日

要旨：渋江抽斉の『靈枢講義』に引用されているも詳細不明であった「古抄本」に相当すると思われる写本を北京大学図書館で発見した。調査により以下のようなことが判明した。1. 写本の書写年代が江戸前期，寛文・延宝頃と推定されること。2. 「古抄本」と称する本は，十二卷本系の内，巻首に『新刊黄帝内経靈枢』と題する系統の本で，現存する『新刊黄帝内経靈枢』のいずれにも一致しない刊本から転写された可能性があることが推定できた。3. 『靈枢講義』中に「古抄本傍記」なるものが本文校訂に使用されているが，この「傍記」なるものが馬台玄の『黄帝内経靈枢註証発微』に由来するものであることが分かった。

キーワード：渋江抽斉，『靈枢講義』，北京大学図書館所蔵靈枢古写本

I. 問題の所在

森鷗外(1862-1922)の史伝小説でも名高い渋江抽斉(1805-58)の『靈枢講義』(以下『講義』と略す)は，「抽斉の謹厳実直な正確を反映し，『太素』『甲乙経』などの典籍と詳細な校合がなされるが，私見は抑制してある。考証学的『靈枢』研究の最高峰に位置する書で，抽斉の代表作といえる。」¹⁾とされ，今日では中国でも活字排印本が発行され，『靈枢』の注釈書として高い評価を受けている。周知の通り，江戸考証学の研究成果は，明治維新以降，漢方廃絶のなかで長く忘れ去られてしまっていた。それ故に再評価され脚光を浴びたのは近年のことである。その間に，彼らの蔵書は分散し，果ては海外まで流失するものさえあった。また彼らの著作も失伝してしまったものも多く，彼らが著作の中に引用している本も現在となっては詳細が不明となっているものも多い。『講義』の中に引かれている『靈枢』のテキストの一つである「古抄本」或いは「古本」と称されるテキストもそのような本の一つである。抽斉は『講義』の中で，本編の前に，先行する多紀元簡

(1755-1810)の『靈枢識』の「綜概」及び「校訂各本引抛註本目録」を引き²⁾，それに自身の見解を註として加えて『靈枢』諸テキストを評価している。そこでは，二十四卷本系として無名氏本，周曰刊本，坊本こと風月莊左衛門本が，十二卷本系として古林書堂本，熊宗立本，そして趙府居本，呉梯本，呉勉学本が，二十三卷本系として道蔵本が記されているが，「古抄本」なる本に関して一切言及されていない。また抽斉が著者として名を列ねる『経籍訪古志』³⁾においても，「古抄本」についての記載はない。「古抄本」というややもすれば何かしら特別なものを想起させるような名前と呼ばれるこのテキストに対して一切の説明も無しに『講義』の考証に使われているのである。著者は数年前から中国大陸の図書館・研究所に所蔵される古医書の調査を行ってきたが，その過程で北京大学図書館に所蔵されている写本が，この「古抄本」に当たると推定出来ることに気づいた。そこで本稿では，まず北京大学図書館所蔵の写本を紹介し，次いで『靈枢講義』引く所の「古抄本」と比較を行う。更に伝来の『靈枢』諸刊本の内でもうどう位置づけられるのかを論じる。

II. 北京大学図書館所蔵 『靈枢』古写本』の書誌

(1) 「古写本」の書誌

新刊黄帝内経靈枢 十二卷 (宋) 史崧音釈 江戸前期⁴⁾ ([寛文(1661-72)・延宝(1673-80)]) 抄本

日本四つ目針眼原裝。渋引厚手表紙、書高27.0×幅20.6cm。外題は表紙に「マ靈枢 一(二・三・終)」を墨書。全4冊、箱帙に収める。宋紹興乙亥仲夏望下の史崧の序1葉半、改葉せずにそのまま続けて「新刊黄帝靈枢卷第一」と題し、以下本文十二卷。但し巻一卷末及び巻二卷から巻十一の巻首・巻末に「黄帝素問靈枢集註」と題し、巻十二卷は巻首・巻末に「黄帝内経素問靈枢集註」と題す。料紙は日本楮紙で黄変す。無界、版心無し、無魚尾、葉次無し。10行×16字、小字双行。

第一冊は「九針十二原第一」から「終始第九」、第二冊は「経脉第十」から「口問第二十八」、第三冊は「師伝第二十九」から「陰陽二十五人第六十四」、第四冊は「五音五味第六十五」から「癰疽第八十一」迄を収録する。第一冊の裏表紙に、抽斎自筆の「靈枢古写本」と墨書する付箋が折りこまれている。「弘前医官洪／江氏蔵書記」(洪江抽斎)「森／氏」(森立之)及び「北京大／学図書館」の蔵印記。蟲損甚しく、水染みが有る。

第一冊「邪氣蔵府病形第四」「根結第五」「寿夭剛柔第六」「官針第七」「本神第八」「終始第九」、第二冊「五十營第十五」「營衛生会第十八」、第三冊「逆順第五十五」に訓点が施されている。書名が記されている医書の引用として、倭英の『医学綱目』(全て卷之一「陰陽畜腑部」からの引用)・馬台玄の『黄帝内経靈枢註証發微』が有り、音釈・語釈などの書き入れが有り、しばしば人名・書名に野線を引く。筆跡からみて本文・訓点・書き入れは同一の手に依ると思われる。また書写年代は料紙や書跡からみて江戸時代前期、寛文・延宝年間頃と推定される。破損が甚しく、現在は原本の閲覧不可⁵⁾。北京大学図書館編。北京大学図書館蔵李氏書目(中)。北京：北京大学図書館；1956。p.26。北京大学図書館編。北京大学図書館善本目録。北京：北京大学出版；1999。p.236に

は「新刊黄帝内経靈枢一二卷 日本旧抄本(巻二以下題黄帝素問靈枢集註) 四冊」と著録するが、「新刊黄帝内経靈枢 十二卷(宋)史崧音釈 日本江戸前期([寛文・延宝頃])抄本 四冊」に作るのが適切。典蔵号SB/5487

(2) 北京大学図書館所蔵の経緯

この本は、蔵書印から抽斎と森立之(1807-1885)の手を経て、その後李盛鐸⁶⁾(1859-1934)に渡ったことが分かる。李盛鐸は、来日に先立つ1880年頃、岸田吟香(1833-1905)と知り合い日本の古書を購入し始め⁷⁾、その後外交官として来日(明治31-34(1898-1901)年)した際に、島田翰(1879-1915)の助力で大量の古籍を購入し帰国したことはよく知られている。彼の死後、彼の蔵書は胡適(1891-1962)の仲介により当時の燕京大学つまり現在の北京大学が購入した。当写本もそのような理由で北京大学図書館に所蔵されている本の一つだったのである。

III. 『靈枢講義』所引「古抄本」と 北京大学図書館所蔵「古写本」の対比

次に『講義』の古抄本言及箇所と北京大所蔵写本の対応を列挙する。『講義』／北京大所蔵写本の順番で表記し、2-1は巻二第一葉を表し、aは表、bは裏を表し、その後に行を附す。なお『講義』の葉次は、『講義』自筆稿本影印⁸⁾に基づく。また行間に書き入れの有る場合はそれが挿入されるべき行を位置とした。上部や下部に有る場合には、行ではなく上・下を附して位置を表記する。

序

1. 首-4b上/序-1b7 2. 首-6a上/序-2a5⁹⁾

九針十二原第一

3. 1-6a上/1-2a10

本輪第二

4. 1-21a上/1-7a4

5. 1-21a7/1-7a6

6. 1-23b5/1-8a9

7. 1-27a上/1-10a6

邪氣蔵府病形第四

8. 2-9a7/1-16b下

9. 2-11b上/1-17b5

10. 2-19b3/1-20a4

11. 2-24b上/1-21b3

12. 2-25b上/1-23a10¹⁰⁾ 13. 2-27b8/1-22b3¹¹⁾ 上膈第六十八
 寿夭剛柔第六 56. 19-23b上/10-8b7
 14. 3-15a7/2-6a5 15. 3-19a上/2-7b4 邪客第七十一
 官針第七 57. 20-4b上/10-15a3²⁶⁾ 58. 20-10b上/10-15a3
 16. 3-21a8/2-8b1 17. 3-21b上/2-8b3 59. 20-16b8/10-14b1²⁷⁾ 60. 20-18b1/10-15a1
 18. 3-23a1/2-9a3¹²⁾ 19. 3-24b7/2-9b下 61. 20-18b上/10-15a3
 20. 3-24b7/2-11b3 通天第七十二
 本神第八 62. 20-20b7/10-15b10²⁸⁾ 63. 20-21a上/10-17b7
 21. 4-1a下/2-11b5¹³⁾ 22. 4-4b6/2-12b6¹⁴⁾ 64. 20-24b上/10-17b7 65. 20-25b下/10-17b7
 終始第九 官能第七十三
 23. 4-16b上/2-16a2 24. 4-22b上/2-17b7 66. 21-9a下/11-4a6
 25. 4-23a上/2-18a上 26. 4-27a上/2-19a上¹⁵⁾ 刺逆真邪第七十五
 經脉第十 67. 21-23a上/11-13a9 68. 21-32b4/11-13a9
 27. 5-1b上/3-1a7 28. 5-3b上/3-1b6 69. 21-33b5/11-10b1 70. 21-34b2/11-10b10
 29. 5-8b上/3-2b9¹⁶⁾ 30. 5-17a下/3-5a3 71. 21-38b7/11-12b3²⁹⁾
 31. 5-48b2/3-14a4
 經別第十一 稿本である『講義』は、改稿する過程で、罫線
 32. 6-3b上/3-17b9 が引かれているものが有る。影印本では見え難い
 經水第十二 34. 6-15b上/3-20b5¹⁷⁾ が、幸い『講義』の原本を実見すると読める場合
 經筋第十三 36. 7-2a上/4-1a7 が多い。実見によって確認出来た部分を以下に列
 35. 7-2a上/4-1a5 挙する。
 37. 7-13a上/4-4b5
 脉度第十七 小針解第三
 38. 8-10a下/4-11a6 72. 2-3a上/1-15b6³⁰⁾
 39. 8-11a上/4-11b5 邪氣藏府病形第四
 營衛生会第十八 73. 2-23a上/1-23a9³¹⁾
 40. 8-17b下/4-13b2 寿夭剛柔第六
 四時氣第十九 74. 3-19b上/2-7b9³²⁾
 41. 8-24b1/4-15a下¹⁸⁾ 42. 8-25a上/4-15a10 終始第九
 43. 8-26b1/4-15b3 44. 8-27b1/4-15b6 75. 4-25a上/2-20a2³³⁾ 76. 4-25b5/2-20a2³⁴⁾
 45. 8-27b1/4-15b下 46. 8-28b6/4-16a1 77. 4-27a上/2-20a2³⁵⁾ 78. 4-28b下/2-20a3³⁶⁾
 47. 8-29a下/4-16a4¹⁹⁾ 48. 8-29b下/4-16a9²⁰⁾
 衛氣失常第五十九
 49. 17-9a4/9-3b4 50. 17-9b3/9-3b9²¹⁾
 51. 17-10b4/9-4a6²²⁾ 52. 17-14b7/9-5b10²³⁾
 玉版第六十
 53. 17-17a7/9-6b10²⁴⁾
 陰陽二十五人第六十四
 54. 18-23b8/9-17a3²⁵⁾
 百病始生第六十六
 55. 19-9b下/10-6b4

以上のように、『講義』中の「古抄本」と北京
 大学図書館所蔵写本は対応しており、文字も基本
 的に一致する。そしてこの北京大学図書館所蔵写
 本は、抽斎の旧蔵であることから、北京大学図書
 館所蔵靈樞写本は、『講義』所引「古抄本」であ
 るとほぼいえる。

IV. 「古抄本」の系統について

(1) 現存する十二巻本との対比

では次に、この北京大学図書館所蔵写本が現存するテキストのどの系統に属するかについて考えてみたい。まず当写本には史崧の序があるので現存の諸本と同じく南宋以前に遡るものではない。十二巻本は、元の胡氏古林書堂本より始まる³⁷⁾最も流通しているテキストの系統で元版一種、明版六種、朝鮮版一種が現存している。当写本は、十二巻本系のテキストの内、第一巻の巻首に『新刊黄帝内経靈枢』と題するものである。現存しているもので該当するものとしては、先に挙げた元の至元己(5(1339))刊卯胡氏古林書堂本、明の成化甲午(10(1474))刊熊宗立種徳堂本、嘉靖癸丑(32(1553))刊熊宗立重刊種徳堂本、嘉靖年間に歴城の教諭となった田経が刊行した刊本の四種³⁸⁾あり。これらの刊本の版式は同一である。これら『新刊黄帝内経靈枢』諸刊本を校合してみた所、やはり文字の異同が少しく有った³⁹⁾。

では現存する『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本と北京大学図書館所蔵写本の関係はどのような関係であろうか。北京大学図書館所蔵写本が現存する『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本からの転写されたものであるならば、北京大学図書館所蔵写本と『新刊黄帝内経靈枢』諸刊本と校合すれば、北京大学図書館所蔵写本の藍本が特定できる筈である。

しかし、実際には、刊本と写本の間には容易には解決し難いさまざまな問題が存在している。まず第一に物理的な条件の問題がある。成化刊熊宗立本は、完本が静嘉堂文庫に、残欠本が北京中医药大学図書館に所蔵されている以外、管見では見あたらない。完本である静嘉堂文庫本は、不鮮明な箇所や破損で文字の欠けた部分がまま有り、このままでは精査が完遂できない状態にある。

より大きな問題は、写本を書写する場合に必然的につきまとう誤写⁴⁰⁾の問題である。刊本との異同があった場合、それが誤写に因るものかテキストの違いに因るものかを明確に区分することは難しい。北京大学図書館所蔵写本と『新刊黄帝内経靈枢』諸刊本を校合してみると、北京大学図書館

所蔵写本と四種の刊本の間には異同が有り、いずれとも一致⁴¹⁾しなかった。

しかし校合をしている内に、誤写の可能性を排除することが出来る異同、つまり書者が特定の文字を意識して書いたことが明かで誤写の可能性を排除することが出来ると思われる箇所での異同を発見した。以下に挙げる例は、北京大学図書館所蔵写本が現存する『新刊黄帝内経靈枢』のいずれにも一致しない刊本から転写したことを示唆するものである。

北京大学図書館所蔵靈枢写本「口問第二十八」(5-19a5)は本文「故上気不足、脳為之不滿、耳為之苦鳴、頭為之苦傾、目為之眩」に作り、上に「一本目為之苦／眩 馬氏注／目為之眩」と書き入れが有る。『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本の内、古林書堂本・熊宗立本・嘉靖重刊本は「眩」を「鳴」に作り、田経本は「眩」に作っている。また『新刊黄帝内経靈枢』以外の十二巻本系テキストの朝鮮活字本⁴²⁾は「鳴」に作り、趙府居本・呉悌本・呉勉学本は「眩」に作っている。二十四巻本系である無名氏本は「鳴」に作り、周曰刊本は小字双行で「苦／眩」に作り、坊本は「眩」に作っている。二十三巻本の道蔵本は、「眩」に作っている。二巻本の詹林所刊本は「鳴」に作っている。諸本の異同と上部の書き入れから考えるに、北京大学図書館所蔵靈枢写本の書者は、明確に本文を「眩」と認識して書いたと思われる。

以上に挙げたものは、誤写の可能性がほとんど無いという意味で一例ながらも貴重な例であると考えられる。上記のような例をこれ以外発見出来ていないが、上記の例や現存する『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本との異同から考えて北京大学図書館所蔵靈枢写本は、現存する『新刊黄帝内経靈枢』のいずれにも一致しない刊本から転写された可能性が有るといえるのではないかと思う。

現存する『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本の版式はすべて同じである。現存する『新刊黄帝内経靈枢』のいずれにも一致しない刊本も、現存する『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本と版式が同じだったと推定される。現存する『新刊黄帝内経靈枢』の諸刊本は、「明知逆順正行無問者、言知所取之

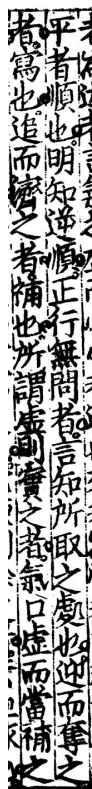


図1 杏雨書屋所蔵「田経本」の該当部分

処也。迎而奪之者，写也。追而濟之者，補也。」（小針解第三）に作るが、「者写也追而濟之者」を、北京大学図書館所蔵写本は「平者順也明知逆順」（1-13b）に作っている。北京大学図書館所蔵写本では、意味が通じ難いものになっている。これは実際に該当箇所を版本で見ると分かるが、行末まで写し終えた後に次の行に移らずに元の行を写してしたことによって生じた誤写と考えられる（図1）。このような誤写から考えるに現存する『新刊黄帝内経靈樞』のいずれにも一致しない刊本も、現存する『新刊黄帝内経靈樞』の諸刊本と版式は同一だったと思われる。

(2) 「古写本」の「傍記」について

『講義』に於て「古抄本」の特徴的な利用として「古抄本傍記」なる書き入れを以て本文校訂をしている箇所がある。次に「古抄本傍記」なる書き入れが如何なるものかを論じる。以下に『講義』に見える「古抄本傍記」の例を挙げる。

○形寒飲則傷肺，以其兩寒相感，中外皆傷，故氣逆而上行，（邪氣藏府病形第四）

原本逆誤道各本同依古抄本傍記今正，甲乙經作迎⁴³，（2-9a7）講（1-16b下）古

○三曰恢刺，恢刺者，直刺傍之，拳之前後，恢筋急，以治筋痺也，（官針第七）

原本脱者字，各本同，今依古抄本傍記補⁴⁴，（3-24b7）講（2-9b下）古

○故刺肥人者，以秋冬之齊，（終始第九）

原本脱以字今依古本傍記補⁴⁵，（4-23a上）講（2-18a上）古

○岐伯荅曰，四時之氣，各有所在，灸刺之道，（四時氣第十九）

原本刺誤別各本同今依古抄本傍記正⁴⁶，（8-24b1）講（4-15a下）古

これらは、いずれも原本つまり無名氏本では、難読の箇所であり、「傍記」に従って改めれば読解可能となる。

また訂正には至らないも、「古抄本傍記」を言及する箇所としては、以下のような例がある。

○其脉乱氣散，逆其營衛，經氣不次，因而刺之，則陽病入於陰，陰病出為陽，則邪氣復生，粗工勿察，是謂伐身，形体淫泆，（終始第九）

古抄本傍記為作於。甲乙經，勿作不，身形乙，道藏本及甲乙經，淫泆作淫灤，淫灤，見素問骨空論⁴⁷，……（4-27a上）講（2-19a上）古

○必堅，來緩則煩悶，來急則安靜，（四時氣第十九）

古抄本兩吳本悞誤悅古抄本傍記作悶（8-27b1）講（4-15b下）古

「傍記」の正体に関していえば、訂正には至っていない「四時氣第十九」の例こそ重要である。上に挙げた註に続けて、『講義』は「馬蒔曰，水方盡時，其肉必堅，且水，來緩則內必煩悶，來急則內必安靜，……（中略）大素，作必堅束之緩則煩悶束急則安靜，甲乙經同，只緩上有束字，窓作悶，……」に作る。抽斎は『甲乙經』（卷之八 水膚脹鼓脹腸覃石瘕第四）や「傍記」に見られる「悶」（もだえる）や『太素』（卷第二十三 九針

之三 雜刺)の「窓」(こころがむすぼれる、不平を懐く)ではなく、原本に従って「愧」(わずらう)が適切だと考えていることが分かる。『講義』註を読む限りでは馬台玄と「傍記」が奇しくも一致しているような印象しか受けないが、北京大学図書館所蔵写本を見ると本文は「必堅、来緩則煩悦、来急則安静。」(4-15b)に作り、下部に「馬氏注作／閔」と書き入れが有り、はっきりと「傍記」が馬台玄の『黄帝内经霊枢註証発微』に基づくものであるということが記されている。

『講義』に於て、本文が訂正される際の考証には、『太素』『甲乙経』が引用されることが多い。上記の本文訂正例は、「邪氣藏府病形第四」のように本文の訂正としては不適切である場合のみ『甲乙経』に言及し、本文を訂正するのに適切であった場合には『太素』や『甲乙経』には言及していない。『太素』『甲乙経』を引用せず「傍記」のみを記し、本文を訂正する上記の本文訂正は、「傍記」の正体を知ってしまった今の時点から鑑みるに、考証として不可解であるといえる。本文の訂正に「傍記」をなぜ使ったのか、それが馬台玄本に由来するものであることをなぜ記さなかったのか、そして訂正の論拠として適切だった『太素』『甲乙経』をなぜ引用しなかったのか。恐らく『講義』が未完成であったことが原因と推測されるが、それが正しいのか、今となっては抽斉の正確な意図を確かめる術はない。

一方、北京大学図書館所蔵写本の書者が『霊枢』を理解する際に『黄帝内经霊枢註証発微』を参考にしていたことは、上記の「傍記」がよく示しており、はっきりと分かる。馬台玄の『黄帝内经霊枢註証発微』は、初版が万暦十四(1586)年に出版された本格的な『霊枢』註釈書の嚆矢となった本である。日本では古活字本が慶長十四(1609)年と寛永二(1625)年に刊行され、整版が寛永五(1628)年に刊行⁴⁸⁾されている。このことから、『黄帝内经霊枢註証発微』は江戸時代初期に『霊枢』の註釈書として需要が高かった書物であったことが伺える。また北京大学図書館所蔵写本の推定書写年代である江戸前期である寛文・延宝頃にもその影響力は引き続き大きかったと思われる。

考 察

北京大学図書館所蔵写本つまり「古抄本」が『新刊黄帝内经霊枢』の系統である以上、善本性という意味に於て、この写本は祖本である古林書堂本に到底及ぶものではない。それ故に善本解題書目である『経籍訪古志』に著録されていないのも肯諾することが出来る。また「古抄本」に独自の価値を有すると思わせる「傍記」も、馬台玄の『黄帝内经霊枢註証発微』に依るものであれば、「古抄本」に本文の改訂の論拠になるような独自の価値は無いといえる。

仮に北京大学図書館所蔵写本を校勘などで使用する場合には、北京大学図書館所蔵写本にはしばしば単純な誤写と思われる箇所が存在するので、異同には元版の古林書堂本を筆頭に『新刊黄帝内经霊枢』の諸刊本を参照する作業が必要である。そして書き入れには、馬台玄の『黄帝内经霊枢註証発微』と突き合わせて、馬台玄本に由来するか否かを確認する必要がある。

抽斉は単に古い抄本といった意味でこの写本を「古抄本」と呼んだのであろう。今後『講義』を読む際には「古抄本」という名に惑わされることのないように願うものである。

謝 辞

貴重な原本の閲覧や複写を許可して頂いた北京大学図書館・北京中医薬大学図書館・中国中医科学院図書館・京都大学附属図書館・東京大学総合図書館・東北大学附属図書館・国立国会図書館・国立公文書館・杏雨書屋・静嘉堂文庫に深謝いたします。また北里大学附属東洋医学総合研究所医史学研究部の小曾戸洋部長と茨城大学人文学部の真柳誠教授には、資料の提供だけではなく様々なご教示を受けたことを特に記します。また調査の間に、多くの方々の援助と励ましを承けたことに感謝いたします。

註

- 1) 小曾戸洋. 日本漢方典籍辞典. 東京:大修館書店; 1999. p.405.

- 2) 抽斉は、『講義』に引く「綜概」及び「校訂各本引拠註本目録」で言及されている『靈樞』の諸刊本を全て使って全面的に本文校訂をしていないように思われる。抽斉が改稿の途中で病で卒し、『講義』が未完成であったことがその原因だと推定されるが、『講義』の註には、熊宗立本や道蔵本は僅かにしか引用されていない。また十二巻本系の祖本であり、現存する『靈樞』で最も古い版本である元版の古林書堂刊『新刊黄帝内経靈樞』は、「校訂各本引拠註本目録」ではなく「綜概」(首-20b3)に抽斉が「善按熊氏所原元槧本、今見存、詳見医籍考」と註している。実際『講義』の引く『医籍考』には古林書堂本についての言及が有るが、管見の及ぶ限り『講義』の本編の註には引用されていないようである。古林書堂本、熊宗立本に代わって「古抄本」つまり北京大学図書館所蔵写本が十二巻本系テキストの一つである『新刊黄帝内経靈樞』を代表する形になっている。今後『講義』を読む際には、特に十二巻本系テキストで校訂している箇所は、十二巻本系の祖本である古林書堂本を参看する必要があると思われる。
- 3) 渋江全善・森立之等。経籍訪古志。解題叢書。国書刊行会編。東京：国書刊行会；1921及び経籍訪古志初稿本。東京：日本書誌学会；1935を参照。郭秀梅・真柳誠。多紀元堅の著述。漢方の臨床。1995；42(10)：1247-1255に依れば、『経籍訪古志』写本は、「森立之・渋江全善・小島尚真写の安政二年(一八五五)第三次稿四巻一冊が大東急に、第四次稿八巻三冊が国会に、八巻三冊が大東急に、六巻補遺一巻三冊が静嘉堂に、三冊が東大に、医家類を付す二巻二冊が杏雨書屋にある」という。大東急所蔵本以外、閲覧したが、記載はなかった。抽斉の蔵書目録である『渋江書目鈔』(国会、静嘉堂、杏雨,)、『青婦書屋儲蔵目録』(国会、静嘉堂、東北大、安田文庫(焼失、『椎園』第三輯に翻字が有る))、『抽斉蔵書目録』(東大)を閲覧したが、それらにも記載は無い。
- 4) 書写の年代に関しては、料紙や書跡から見て江戸前期、寛文・延宝頃のものではないかと、茨城大学人文学部真柳誠教授のご教示を頂いた。また当写本の書者は、運氣論に強い関心を持っていたようである。第一冊以降書き入れや訓点を施すことが減る当写本に於て一冊以降訓点が附されているのは、一昼夜に營氣が運行する回数と脈行の長さを説く「五十營第十五」(第二冊)と營氣・衛氣の生成と会合について説く「營衛生会第十八」(第二冊)と氣の運行には順逆が有りそれは天地・陰陽・四時・五行に順応することを説く「逆順第五十五」(第三冊)であることも、書者の運氣論に対する強い関心を表していると思われる。『医学綱目』巻之一「陰陽音腑部」から運氣論に関するものを引用し書き入れするのは、先に挙げた「五十營第十五」(第二冊)、衛氣の循環の概説を説く「營氣第十五」(第二冊)・衛氣行第七十六(第四冊)であり、特に「衛氣行第七十六」は、別に付箋を用いて『医学綱目』を長く引用している。日本に於て『素問入式運氣論奥』は、慶長十六(1611)年梅寿刊古活字本に始まり、17世紀に何度も出版されている。また江戸前期には、有名な所では岡本一抱の『運氣論奥診解』など中国では出版されなかった『素問入式運氣論奥』の注釈書がいくつか出版されており、推定される書写年代との関係が伺える。
- 5) 2006年2月に調査した際、はじめは原本を閲覧し調査していたが、ちょうど書誌事項の一通りの調査を終えた時に、破損が激しい為、館員から原本閲覧不可の旨を告げられた。以降、マイクロの閲覧で調査を続行した。マイクロは撮影の状態が悪く、不明瞭な箇所がしばしば有る。本来は原本を用いて論文の作成をすべきであると思うが、原本閲覧不可の為、マイクロと紙焼きと一部デジカメ撮影の写真に依って作成した。2009年10月に再度原本閲覧の申請を行ったが、やはり原本は破損の為、閲覧できなかった。
- 6) 李盛鐸の蔵書に関しては、蘇精。近代蔵書三十家(増訂本)。木樨軒李盛鐸。北京：中華書局；2009。p.25-30、北京大学図書館。北京大学図書館蔵李氏書目引言。北京大学図書館蔵李氏書目。北京：北京大学図書館；1958。p.1-2、張玉範。李成鐸及其蔵書。李盛鐸。張玉範。木樨軒蔵書題記及書録。北京：北京大学出版；1984。p.422-24を参照。
- 7) 真柳誠・陳捷。岸田吟香が中国で販売した日本関連の古医書。東京：日本医史学雑誌。1996；42(2)：164-165によれば、「張玉範「李盛鐸及其蔵書」も「李盛鐸は一八八〇年に岸田吟香を知り、海外の金石図籍を購入し始めた。明治維新から日本人が古籍を軽視するので、岸田は帰国して集めた古書を上海で売り、李氏は多くの日本古刊本・活字本・旧抄本を購入した」と記す。
- 8) 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵渋江抽斉自筆稿本『靈樞講義』(レ18)の影印は小曾戸洋・篠原孝市。黄帝内経注選集。大阪：オリエント出版；1985の所収本を使用し、見え難い部分は出来るだけ実見して確かめた。
- 9) 『講義』の匡郭の上に「趙府本吳悌本古抄本令作今」と書き入れが有る。北京大学図書館所蔵写本は「今」に作り、右側に「レイ」と書き入れが有る。趙府本・吳悌本は「今」に作る。趙本こと趙府居本の底本としては、四部叢刊。上海：上海商務印書館；1922の所収本を使用した。吳悌本の底本としては篠原孝市監修。黄帝内経版本叢刊。大阪：オリエント出版社；1993の所収本を使用した。
- 10) 『講義』本文「取諸外經者、掄申而從之、」に作り、匡郭の上に「史崧曰、掄春朱切、趙本古抄本開本」と書き入れが有る。無名氏本は本文「掄」に作り、音釈「掄、春朱切」に作る。趙本は、本文「掄」に作り、音釈に「掄、春朱切」に作る。北京大学図書館所蔵写本は、

本文「揄」に作り、マイクロが不鮮明の為断言できないが音釈の見出し字は恐らく「揄」に作り、朱の上の字は「春」に「日」の部分の左に縦棒が有る字に作る。周本は本文「揄」に作り、音釈「揄春朱切」に作る。「春」に引かれた罫線の意図は不明。なお本稿で引く『講義』の本文及び註は、抽斉の意図を枉げないように句読点や段句を抽斉自筆本に依りそのまま引用している。故にしばし句読点がないものや文末に「」が有るものや時には無いものなどを引用するが、抽斉自筆本『講義』の句読点をそのまま引用した為であることをあらかじめお断りしておく。無名氏本の底本としては、『靈枢』(最善本)、日本内経学会;1999を使用した。周本こと周曰刊行本の底本としては、黄帝内経版本叢刊所収本を基本とするが、一部に確認し難い箇所が存在するので、中国中医科学研究院図書館所蔵本(順序号841 索書号丑12/0762/2/2 財産号184191-96)も使用した。

- 11) 『講義』註「原本、小腹誤小便、周曰校刊本同、今正、」に作り、「便」の右側の行間に「~~周本坊本及張氏類經~~」と、「今正」の右側の行間に「~~依古抄本兩吳本~~」と書き入れが有る。これらに引かれた罫線は一見墨消しのように見える。周本・坊本・類經(卷二十 針刺類〇二十四)が「小便」に、北京大学図書館所蔵写本・兩吳本が「小腹」に作っていることから考えるに、書き入れに引かれた罫線は、訂正・削除の為ではなく、強調の意ではないかと推定される。以上のことから書き入れを活かして註文を整理するならば「原本、小腹誤小便、周本坊本及張氏類經同今依古抄本兩吳本正、」となるのではないと思われる。坊本こと寛文三年風月莊左衛門刊本の底本としては中国中医科学研究院図書館所蔵本(順序号842 丑12/0762/2/2 財産号168450-65)を、『類經』の底本としては張氏類經。台北:新文豊出版公司;1975を使用した。
- 12) 『講義』本文「凡刺有九、以応九變、」註「原本以誤日、周曰校刊本同、今正、」に作り、「周曰校刊」の右側の匡郭の外に「~~古抄本 周坊各~~」と書き入れが有る。北京大学図書館所蔵写本は本文「日」に作り、マイクロが不鮮明の為断言できないが下部に「日」字と思われる書き入れが有る。周本・坊本も「日」に作る。以上のことから、匡郭の外に書き入れに引かれた罫線や点は削去ではなく、強調の意だと思われる。書き入れを活かして註文を整理するならば、註文は「原本以誤日、~~古抄本周坊各本同、今正、~~」に作るべきかと思う。各本と記すが「校訂各本引拠註本目録」に引くテキストの道蔵本は「以」に作る。また「校訂各本引拠註本目録」ではなく「綜概」の注で言及されている古林書堂本も「以」に作る。『講義』が「日」を「以」に改めたのは、『講義』の匡郭上に「甲乙經五九^九／^{十二}道^五刺^九邪^邪」と有り、『甲乙經』が「以」に作ることに依ると思われる。『甲乙經』の底本は、中国中

- 医科学研究院図書館所蔵の四周双辺の「映旭齋藏版(以上小字)／甲乙經(以上大字)／歩月楼梓行(以上小字)」の封面を持つ『針灸甲乙經』(順序号1280 寅11/282/2/21 財産号169583-85)を底本とし、医学六経本(順序号1283 寅11/0282/2/21 財産号18530-36)と前者と比べると後印で卷十二の末葉に通修がある医学六経本(順序号1282 寅11/0282/2/22 財産号187256-61)を参考した。また道蔵本の底本としては、正統道蔵。台北:新文豊出版公司;1977を使用した。
- 13) 『講義』本文「黄帝問于岐伯曰、凡刺之法、必先本于神、血脉營氣精神、此五藏之所藏也、至其淫泆離藏、則精失、魂魄飛揚、志意悞乱、」註「趙本古抄本兩吳本必先乙」に作る。註の文末の「乙」字は「乙」字ではなく、「乙」様の字とでも呼ぶべき一種の校正記号である。底本である無名氏本は「必先」に作り、趙府居本・北京大学図書館蔵写本・兩吳本は「先必」に作る。この「乙」様の字は転倒の意。兩吳本とは、吳悌本・吳勉学本のこと。吳悌本の底本に関しては、9)を参照。吳勉学本の底本としては黄帝内経版本叢刊所収本を使用した。
- 14) 『講義』本文「脾愁憂而不解、則傷意、意傷則悞乱、四肢不舉、毛悴色夭、死于春、」註「兩吳本愁憂乙于作於趙本古抄本同」に作る。兩吳本は「憂愁」に作っているの、ここの「乙」様の字も同様に転倒の意味である。
- 15) 『講義』註「古抄本旁記坊本為作於、甲乙經勿作不身形乙、道蔵本、及甲乙經、淫泆作淫灤、……」に作る。北京大学図書館所蔵写本は、マイクロが不鮮明の為断言できないが本文「為」の真ん中に圈点があるように見える。また上に「於」と書き入れが有る。「旁記」に関しては、IV.「古抄本」の系統について(2)「古写本」の「傍記」を参照。「坊本」は、「於」に作る。『甲乙經』は「凡禁者、脈乱氣散、逆其榮衛、經氣不次、因而刺之、則陽病入於陰、陰病出為陽、則邪復生。粗工不察、是謂伐形、身体淫灤、……」(卷之五 鍼灸禁忌第一上)に作り、「形身」に作っている。『講義』註の「身形」の下の「乙」様の字は転倒の意。道蔵本は「淫灤」に作る。
- 16) 『講義』註「原本入上作上入周本同、今正、趙本兩吳本古抄本、……」に作るが、北京大学図書館所蔵写本は「人上」に作っている。
- 17) 『講義』本文「黄帝曰、夫經脈之小大、血之多少、膚之厚薄、肉之堅脆、及膈之大小、可為度量乎、」註「原本度量倒、古抄本同、今乙正」に作る。無名氏本・北京大学図書館蔵写本「量度」に作る。ここの「乙」様の字も転倒の意である。
- 18) 『講義』本文「岐伯答曰、四時之氣、各有所在、灸刺之道、」註「原本刺誤別各本同今依古抄本旁記正」に作るが、道蔵本は「別」ではなく「刺」に作る。北京大学図書館所蔵写本は、本文「別」に作り、「別」の真ん中に圈点を加え、下に「刺」と書き入れが有る。

- 「傍記」に関しては、IV.「古抄本」の系統について(2)「古写本」の「傍記」と46)を参照。
- 19)『講義』影印本では、蟲損の為不鮮明であるが実見すると、匡郭の下に「周本盲誤音本／盲下同」と書き入れが有る。周本・趙本・北京大学図書館所蔵写本は「盲」に作る。
- 20)『講義』本文「故取之盲原以散之，刺太陰以予之，取厥陰以下之，取巨虚下廉以去之，按其所過之経以調之，」註「趙本，古抄本下誤不，……」に作る。マイクロが不鮮明の為，断言できないが北京大学図書館所蔵写本は「不」の中央に圈点が有るように見る。そして上部に「下」と書き入れが有る。
- 21)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，註の「道藏本」と「趙府本」の間の句点の右側に朱墨で「古抄本」と書き入れが有る。
- 22)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，註「諸家註本」の右側に朱墨で「古抄本異本」と書き入れが有る。
- 23)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，本文「是故膏人縦腹垂腴，肉人者上下容大，脂人者雖脂不能大也，」の文末の「也」の右側に朱墨で「者音」と書き入れが有る。
- 24)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，註文「馬氏……」の右側に朱墨で「古異」と書き入れが有る。
- 25)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，本文「足少陽之上，氣血盛，則通髻美長，血多氣少，則通髻美短，血少氣多，則少鬚，血氣皆少，則無鬚，感於寒濕，則善痺骨痛爪枯也，」の「則少鬚」の「鬚」の右傍に朱筆で「髻音」と書き入れが有る。
- 26)『講義』匡郭の上に「史崧曰，泌，兵湄切古抄本趙本」と書き入れが有る。無名氏本には音積無し。趙府居本・北京大学図書館所蔵写本は，俱に「湄」ではなく「媚」に作る。この書き入れは，一見すると趙府居本・古抄本の音積は「湄」ではなく「媚」に作るということを表しているように思われるが，無名氏本・周本・坊本といった二十四卷系にはこの音積が無く，現存する『靈樞』諸刊本で音積の有るものは，全て「湄」ではなく「媚」に作っている。恐らくこの書き入れの本来の意図は，「史崧曰，泌，兵媚切」の音積は，『講義』の底本である無名氏本には無いが，古抄本と趙本には有るという意味だと思われる。
- 27)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，註「趙府刊本……」の「刊本」の右側に朱筆で「古抄本」と書き入れが有る。
- 28)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，註「坊本」の上に朱筆で「古異」と書き入れが有る。
- 29)『講義』影印本では，不鮮明であるが実見すると，本文「其氣外發腠理，開毫毛，搖氣往來，行則為痒，留而不去，為痺，衛氣不行，則為不仁，」の「為痺」の「為」の右側に朱筆で「則音」と書き入れが有る。
- 30)『講義』匡郭の上に「史崧曰，内音納古抄本音」と書き入れし，「古抄本／音積」に野線を引く。『講義』の底本である無名氏本も同じなので，野線は，冗長を避ける為の削除の意だと思われる。
- 31)『講義』匡郭の上に「史崧曰，／瘡榮美」と書き入れし，更にこの書き入れの上に「切音」と書き入れを加え，「古抄／本」に野線を引く。無名氏本の音積は「瘡，榮美」に作り，北京大学図書館所蔵写本は「瘡，榮美切」に作る。これから考えるに，無名氏本の音積は「瘡，榮美」に，「古正本」の音積は「切」字が有るということを示したかったのと思われる。この野線は，削除の野線ではなく，強調の意の野線だと思われる。
- 32)『講義』本文「乾并用原本之淬与綿絮，」に作り，匡郭の上に「周本并下有用字／古抄本異／勉学本／並有用字，」と書き入れが有る。周本・北京大学図書館所蔵写本・異勉学本には「用」字が有る。「用原本之」と有るが，無名氏本も「用」字が有り，その他現存する刊本を見たが全てに「用」字が有る。「用」の下の「原本脱之」が誤りだとすれば，この野線は，冗長を避け文意を整える為の削去の意とも考えられるが，この野線の意図は不明。但し北京大学図書館所蔵写本にも「用」字が有るので，この書き入れ自体が北京大学図書館所蔵写本が「古抄本」であること否定するものではない。
- 33)『講義』匡郭の上に「史崧曰繆眉救／切古抄本有文」に作り，「古抄本有／文」に野線を引く。音積は北京大学図書館所蔵写本にも底本である無名氏本にも俱に存在するので，野線は，冗長を避け文意を整える為の削去の意と思われる。
- 34)『講義』本文「男内女外，……」に作り，註文「道藏本古抄本音積去，史崧曰難経作男外女内，」に作る。道藏本・北京大学図書館所蔵写本は俱に音積「男内女外，難経作男外女内」に作る。野線は，訂正し文意を整える為の削除の意と思われる。
- 35)『講義』匡郭の上に「史崧曰，滌迷各反古抄本周本趙本述作述按迷疑迷来語」と書き入れし，「古抄本」に野線を引く。また同じく匡郭の上に「述周本／趙本」と書き入れが有る。北京大学図書館所蔵写本は「迷」に作っている。野線は，訂正し文意を整える為の削去の意と思われる。
- 36)『講義』匡郭の下に「史崧曰長／平声，古抄本」と書き入れし，「古抄本」に野線を引く。音積は底本である無名氏本にも北京大学図書館所蔵写本にも俱に存在する。野線は，冗長を避け文意を整える為の削去の意と思われる。
- 37)目録の第一葉表第二行目に「元作二十四卷 今併為十二卷 計八十一篇」と有る。
- 38)古林書堂本の底本としては，黄帝内経版本叢刊所収の宮内庁書陵部所蔵本(四〇〇函九六号)を基本とするが，宮内庁書陵部所蔵本の影印本では確認し難い箇所が存在するので，中華再造善本 新刊黄帝

内経霊枢。北京：北京国家図書館出版；2005（国家図書館所蔵本 六八三五号の影印）も使用した。成化刊熊宗立本の底本としては、黄帝内経版本叢刊所収の静嘉堂文庫所蔵本（熊宗立編『医学叢書』11函18号に所収）影印を使用し、見え難い部分は出来るだけ実見して確かめた。田経本の底本としては、杏雨書屋所蔵本（杏1964）を使用した。嘉靖重刊熊宗立本に関しては、内閣文庫に二套あるが（300-162）を使用した。『杏雨書屋蔵書目録』に「新刊黄帝内経霊枢十二卷一題黄帝素問霊枢集註 宋史崧明音釈 明齋峯熊宗熊宗立本拋紹興二十五年史崧刊本重刊 一帙4冊」（貴233）が著録されているが、実見した所、刊記は欠けているが、嘉靖重刊本であった。嘉靖重刊熊宗立本は、上記三種の刊本とは異なり巻九の巻末に「霊枢卷九畢」と有る。嘉靖重刊熊宗立本以外の上記三種と北京大学図書館所蔵写本は「黄帝素問霊枢集註卷之九」と記しているの、嘉靖重刊熊宗立本は北京大学図書館所蔵写本の藍本ではないと思われるが、以下の考察では参考までに挙げることにする。管見の及ぶ限りでいうと成化刊熊宗立本の『霊枢』は、完本が静嘉堂文庫に、残欠本が北京中医药大学図書館（B13/114）に所蔵されている以外見あたらない。また抽齊が見ていた熊宗立本は、成化刊本ではなく、嘉靖重刊本であると思われる。『講義』中、十にも満たない数少ない熊宗立本への言及の内、『講義』口問第二十八に本文「中氣不足，溲便為之變，腸為之奔鳴，」（10-30b6）に作り，註文「原本溲便誤□使，今正，坊本誤胃使，熊本誤凌使，……」に作る。成化刊本の影印本は不鮮明なので静嘉堂文庫所蔵本および北京中医药大学図書館所蔵本を実見して確かめた所，成化刊本は「溲」に作り，嘉靖重刊本は「凌」に作り，『講義』の引用する熊宗立本は嘉靖重刊本であると思われる。

- 39) 以下に異同の一例を挙げる。本文は、『新刊黄帝内経霊枢』の祖本である古林書堂本に基づく。「齒痛，不惡清飲，取足陽明，惡清飲，取手陽明。」（雜病第二十六）は，成化刊熊宗立本は「取足陽明」の「取」を「取」に作る。田経本，嘉靖重刊熊宗立本は，古林書堂本と同じ。「岐伯曰，嬰兒者，其肉脆血少氣弱。刺此者，以毫刺，淺刺而疾發針，日再可也。」（逆順肥瘦第三十八）は，田経本は「毫刺」の「刺」を「針」に作る。成化刊熊宗立本また嘉靖重刊熊宗立本は，古林書堂本と同じ。「三焦下膈，在于足大指之前，少陽之後，出于臍中外廉，名曰委陽，是太陽絡也。」（本輸第二）に作るが，嘉靖重刊熊宗立本は「前」を「有」に作る。成化刊熊宗立本，田経本は，古林書堂本と同じ。「凡刺有九，以應九變。」（官針第七）は，成化刊熊宗立本・嘉靖重刊熊宗立本・田経本は「以」を「日」に作る。『経籍訪古志』に「按，素靈如明熊宗立本，此依元槩重彫，」と有るように，成化刊熊宗立本を古林書堂本の翻刻であるとする説があるが，例

に挙げた以外にも字の異なる箇所が少なからず有ること，字様も似ているが異なるので熊宗立本は倣元版とするのが適切である。これらの異同では、「官針第七」以外，北京大学図書館所蔵写本と古林書堂本は一致した。

- 40) 単純な誤写の可能性が高いと思われるものの一例としては、『新刊黄帝内経霊枢』諸刊本は「黄帝曰，扞皮開腠理奈何。」（邪客第七十一）に作っているが，北京大学図書館所蔵写本（10-14b3）は「扞」を「行」に作っている。なおこの箇所の前，同じく邪客第七十一に「黄帝問于岐伯曰，余願聞持針之數，內針之理，縱舍之意，扞皮開腠理，奈何。」と有るが，北京大学図書館所蔵写本は「行」に作っている。
- 41) 39) 及び 40) で見たように，北京大学図書館所蔵写本は，現存の『新刊黄帝内経霊枢』のいずれとも一致はしなかった。しかし，39) で挙げた以外の『新刊黄帝内経霊枢』諸刊本間の異同を北京大学図書館所蔵写本に照らし合わせてみると，古林書堂本と一致することが多々有った。印象でいえば，北京大学図書館所蔵写本は，現存する『新刊黄帝内経霊枢』諸刊本の内では，古林書堂本に近いのではないと思われる。また『新刊黄帝内経霊枢』諸刊本は，官針第七の音釈「恢刺，上苦回切，大也。一本作怪字。」に作るが，北京大学図書館所蔵写本は，「怪」を「慳」に作っている。「慳」は「怪」を誤写したものとも考えられるが，道蔵本も同じく「怪」を「慳」に作っている。この点は興味深い。これ以外にも『新刊黄帝内経霊枢』諸刊本と北京大学図書館所蔵写本との異同には，北京大学図書館所蔵写本と別の系統テキストとで一致することが有る。これらのことは，『新刊黄帝内経霊枢』だけでなく，他の十二卷系の趙府居本・吳悌本・吳勉学本，二十三卷本の道蔵本，二十四卷本系の無名氏本・坊本，二卷本の詹林所刊本も含めて『霊枢』のテキストの成立と流伝の問題として稿を改めて論じたい。
- 42) 朝鮮活字本・詹林所刊本の底本としては黄帝内経版本叢刊所収本を使用した。馬台玄本に関しては，IV.「古抄本」の系統について(2)「古写本」の「傍記」を参照。
- 43) 『太素』は「形寒寒飲則傷肺，以其兩寒相感，中外皆傷，故氣逆而上行。」（卷第二十七 耶論 耶中）に作る。『甲乙経』は「形寒飲冷則傷肺，以其兩寒相感，中外皆傷，故氣逆而上行。」（卷之四 病形脉診第二上）に作る。『太素』の底本としては，小曾戸洋。東洋医学善本叢書。大阪：東洋医学研究会；1982所収本を基本とするが，卷二十一・二十七に関しては，黄帝内経太素（影印本）。大阪：杏雨書屋武田科学振興財団；2007を使用する。また左合昌美。黄帝内経太素新新校正。日本内経学；2009年4月改版，宮川浩也・荒川緑・左合昌美・小曾戸洋。『黄帝内経太素』卷二十一・二十七 凡例・翻字注・解題。大阪：杏

- 雨書屋武田科学振興財団；2008 杏雨（11）：1-106 を参看した。
- 44) 『太素』は「三曰恢刺，恢刺者，直刺傍之，举之前後，恢筋急，□治筋痺者也。」（卷第二十二 九針之二 十二刺）に作る。『甲乙経』は「三曰恢刺，恢刺者，直刺傍之，举之前後，恢筋急，以治筋痺也。」（卷之五 九針九變十二戲五刺五邪第二）に作る。
- 45) 『太素』は「故刺肥人者，以秋冬之齐，……」（卷第二十二 九針之二 三刺）に作る。『甲乙経』は「刺肥人者，以秋冬為之齐，……」（卷之五 針道終始第五）に作る。
- 46) 『太素』は、「岐伯対曰，四時之氣，各有所在，灸刺之道，得氣穴為宝。」（卷第二十三 九針之三 雜刺）に作る。『甲乙経』は、「岐伯対曰，四時之氣，各有所在，灸刺之道，氣穴為宝。」（卷之五 針灸禁忌第一上）に作る。18) も参照のこと。
- 47) 15) を参照。
- 48) 書者が見た可能性がある本としては，以下のようなものがある。中国では二種，明万曆十四（1586）年

刊天宝堂本と明万曆十六（1588）年刊宝命堂本。日本では，梅寿の手に依る宝命堂本を元にした古活字本が二種（慶長十四（1609）年・寛永二（1625）年刊行），整版は「寛永戊辰仲冬／書舎道伴梓行」の刊記を持つ道伴本と「書舎道伴梓行」の部分で「二条通松屋町（以上少字）／書肆武村市兵衛板行」で埋め木をしている武村市兵衛本の計六種類がある。寛永二年の古活字本は管見の及ぶ範囲では日本には完本が無く，台湾の故宮博物院図書館に完本が所蔵されている（箱号一四四二）。寛永二年刊古活字本以外，天宝堂本は内閣文庫所蔵本（300-174），宝命堂本は中国中医科学研究院図書館所蔵本（順序号1026 索書号丑32/1586/2/2 財産号181766-81），慶長十四（1609）年の古活字は，国会図書館所蔵本（Wa7-190）と杏雨書屋所蔵本（貴143），道伴本は杏雨書屋所蔵本（杏5183），武村市兵衛本は内閣文庫所蔵本（300-175）で例に挙げた箇所を確認した所，異同が無く全ての本で一致した。

The Old Transcript “*Kosha-hon* 古抄本” Quoted by Chusai Shibue 渋江抽斉 in His Lecture Manuscript for *Spiritual Pivot (Lingshu)* “*Reisu Kogi* 靈枢講義”

Kenji NAGATSUKA

Department of History of Medicine, Kitasato University Oriental Medicine Research Center, Tokyo

The details about the old transcript “*Kosha-hon* 古抄本” quoted by Chusai Shibue 渋江抽斉 in his *Reisu Kogi* 靈枢講義 had remained unspecified. However, the author found that the *Kosha-hon* is probably now in the possession of the Peking University Library. In addition, through the investigation, the following facts emerged: 1) The date of writing of the transcript can be presumed to be between the Kanbun 寛文 and Enpo 延宝 eras in the Edo period. 2) The book, called “*Kosha-hon*”, can be presumed to transcribe the lost version of the text in the group of the twelve volumes of *XinKan Huangdi Neijing Lingshu* 新刊黄帝内經靈枢. 3) Shibue left side notes, headed “*Kosha-hon Hoki* 古抄本傍記”, and he used them for revision, but in fact these notes originated in the Ma Taixuan’s 馬台玄 *Huangdi Neijing Lingshu Zhuzheng Fawei* 黄帝内經靈枢註証發微.

Key words: Chusai Shibue, *Spiritual Pivot*, *Reisu Kogi*, The Old Transcript of *Spiritual Pivot* in Possession of the Library of the Peking University